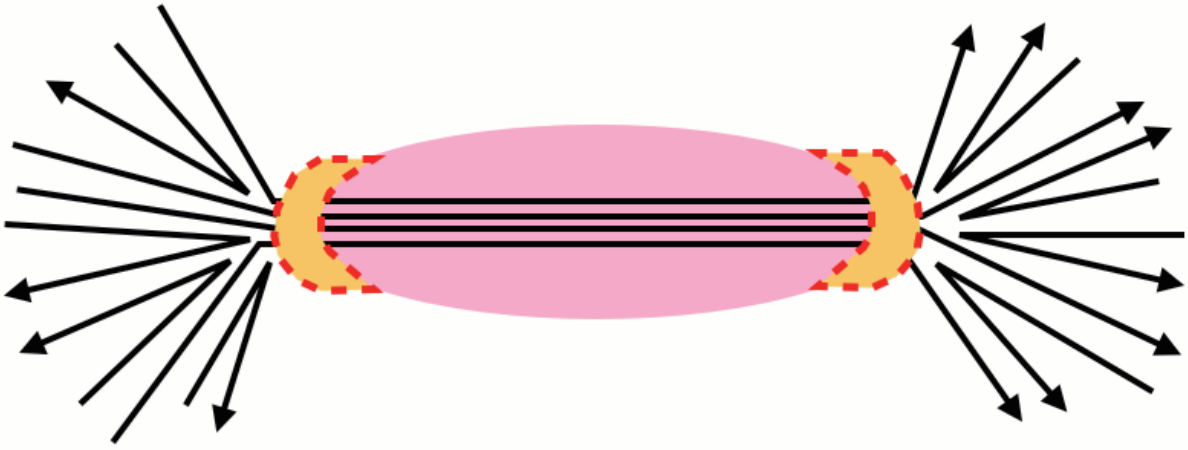
おかえり

オトナ・オンナ２
崔祐美 / 仲尾千枝 / 村井洋子

今回のグループワークのテーマである“Diver-City”という言葉を聞いたとき、私たちの中ですぐに浮かんだのは「場違い」、「アウェー」、「安心できない」という言葉だった。ドレスコードや言語、簡単に馴染むことのできないローカルルールによって場所はアウェー感を人に与える。またその場に集う人自身も、自分の属性を意識しバリアを張ったり解いたりしながら場所に適応していく。本来、場所はどこでも「交わる場所」のはずである。しかし私たちは場所に特徴を与え、自分でバリアをコントロールしながらボーダーラインを作っていく。私たちは「交わらない場所」を理解するためには、つくられた「交わらない」場所ではなく「交わらざるを得ない」場所に行くことが必要だと考え、人が何かの目的のため強制的に結ばれる場所を探した。

そこで選んだフィールドワーク拠点が空港だ。飛行機に乗るためには必ず誰もが空港を利用しなければならない。109がギャルのための場所で、秋葉原がオタクのための場所で、新橋がサラリーマンのための場所ならば、空港は「飛行機に乗る」ための場所である。駅などの交通機関は利用者層を選ばないため、性別、年齢、国籍などあらゆるボーダーを越えた人が集う場所である。自分と趣味や興味を共にしない人と交わらざるを得ない場所だと言える。空港はその様な場所の中でも、ゲートが搭乗券を持っている人と持っていない人を隔てるという特徴を持っている。これから飛行機に乗る人と飛行機から降りてきた人にしか入ることのできない空間があり、それ以外の人は踏み込むことができない。

また飛行機という空の交通機関自体にも、人を隔てるボーダーラインとしての大きな要素があるのではないだろうか。日頃はそれぞれ別のフィールドで暮らしている交わることのない人たちが、飛行機に乗ることによって（大げさな話になってしまうかもしれないが）数時間の運命共同体になるのである。同じ飛行機に乗っている人の一体感は他の乗り物よりも強いのではないだろうか。その一体感が知らず知らずのうちに人を隔てて、ゲート内にもう一本の“見えないボーダーライン”を作り出しているように感じた。



図：人が空港のターミナルで強制的に結ばれ、飛行機で移動する＝運命共同体になる。

到着ゲートの前を何回も歩き回っては、飛行機の便名と到着時刻を何度も確認する父親。
透明なゲートの窓ガラスにへばりつくように立ち、誰かの帰りを待っている。そして彼の待っていた家族がゲートを出てくる。走ってゲートを出てきた息子を抱きとめ、妻の大きな荷物を受け取る。
妻と無言の合図を交わし、家族は去っていく。

ゲートを出て、立ち止まる先生。
ゲートを振り返りながら、誰かを待っている。そこへ、数名の学生と思われる人が先生のもとへ集まる。
一人ずつ、その輪へ加わり、全員揃ったのを確認すると、新たな場所へと出発する。

電光表示板の前から一歩も動こうとしない老夫婦。
些細な変化も見逃さないよう、じっと電光表示板を見つめる。彼らだけの空間がある。
周りの人には動かせない、彼らだけの空間だ。そこへ、待っていた家族がゲートから出てくる。
表面には見えないが、彼らを見ていた私たちには分かる。彼らの喜びを。

これまで述べて来たように、空港には、入場制限によってできるゲートの中と外との空間の違いのボーダーラインや、同じ到着ロビーにいる人の用途の違いによって生まれるボーダーラインが存在する。しかし私たちは、到着ロビーの人々の姿を見ているうちに彼らの表情のなかにもうひとつのボーダーラインがあると感じた。それは、彼らの移動における到着ロビーの位置づけの違いである。目的地に到着したと感じる瞬間は人によって違うのであり、「帰って来た」という感覚を味わう瞬間も人によって違うのである。飛行機が着陸した瞬間、携帯電話の電源を入れメールを受信した瞬間、自宅のドアを開け家族の顔を見た瞬間…到着を実感する瞬間は様々だ。その違いは、共に旅行をしている友人同士や共に出張をした会社員同士の間にも存在する。もちろん、上で述べた同じ飛行機で移動を共にして一体感が生じる他人同士の間にも存在し、一人一人経験してきた事柄が違うように、個々人によって感じ方が違うのである。その違いこそが、私たちが見つけた“見えないボーダーライン”であり、その違いが生まれる到着ロビーは「交わらない場所」、つまり“Diver-City”なのだ。

私たちが飛行機という空の交通手段を選んだときに必ず通過する場所、空港。様々な人々が長距離移動という同じ目的のもとに集まる。そして、人に会うという目的だけのために集まる人もいる。見送る人・見送られる人、迎える人・迎えられる人の間には それぞれのシーンが生まれる。

いってらっしゃい。
元気でね。
気をつけて。
…

おかえり。